

ジャンヌ・ダルク処刑裁判と文学作品 少女の「裏切られた遺言」

中 里 まき子

序

ジャンヌ・ダルクについては、500年以上にわたって数多くの文学作品が創作されてきた。すでに15世紀に、クリスティヌ・ド・ピザンとフランソワ・ヴィヨンによって少女の功績が詩の中に記されたが、ジャンヌを素材とする作品が増え始めたのはフランス革命以後である。その一部を挙げると以下ようになる¹⁾。シラー『オルレアンの乙女(1801)』、シャルル・ペギーの『ジャンヌ・ダルク3幕劇(1897)』と『ジャンヌ・ダルクの愛の神秘(1910)』、アナトール・フランス『ジャンヌ・ダルクの生涯(1908)』、バーナード・ショー『聖女ジャンヌ(1924)』、ジョルジュ・ベルナノス『戻り異端で聖女のジャンヌ(1929)』、ポール・クロードル『火刑台上のジャンヌ(1939)』、バルトルト・ブレヒト『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431年(1954)』、ジャン・アヌイ『ひばり(1953)』。

文学における特権的な素材である以前に、歴史的人物として、キリスト教の聖女として、ジャンヌ・ダルクは世界中で知られる存在となっている。ジャンヌが後世に残したもの、またそれに対する反響の大きさにひきかえ、彼女の生涯は短く、はかないものであった。

ジャンヌは百年戦争が続く1412年、フランスのロレーヌ地方にあるドンレミ村の農家に生まれた。彼女は13歳のときに初めてお告げの「声」を聞いた。大天使ミカエルと聖女カトリーヌ、聖女マルグリットによる「声」は、存亡の危機にあるフランスを救うよう彼女に呼びかけた。その「声」に従い、ジャンヌは1429年3月にシノン城へ赴き、ヴァロワ王家の王太子シャルルに謁見、4月にオルレアンをイギリス軍の攻囲から解放、そして7月にはランスで王太子の聖別と戴冠を助ける。しかし1430年5月、コンピエーニュ解放戦でブルゴーニュ軍の捕虜となり、11月にはルーアンにて投獄される。1431年1月から5ヶ月に及ぶ裁判を経て異端を宣告され、5月30日、ルーアンの広場で火刑に処される。そのときジャンヌは19歳であった。

ジャンヌの生涯を概観すれば、彼女が長年にわたって作家たちの想像力を刺激してきたことがある程度は理解できる。それでも、この少女がなぜ、文学的創造の空間においてこれほどまでに大きな存在感を持ちえるのか。本稿ではその理由を改めて問い直しながら、ジャンヌ・ダルクを素材とする創作がどのように行われ、またどんな問題をはらむかを検討したい。

1) ジャンヌを素材とする文学作品については、次の論文にまとめられている。Jean BASTAIRE, « De Christine de Pisan à Jean Anouilh : Jeanne d'Arc à travers la littérature », *La Revue des lettres modernes*, n° 73-74, 1962, p. 411-431.

1. アンティゴネーとの相似性

ジャンヌ・ダルクについて、なぜ数多くの文学作品が創作されるのか。この問題に取り組むための手がかりとして、近現代ヨーロッパ文学において、ジャンヌがギリシャ神話の人物アンティゴネーと近い位置にあることを確認したい。

シャルル・ペギーは1894年、ソフォクレス原作の『アンティゴネー』の上演に感銘を受け、その後、自らソフォクレスの翻案を行う代わりに、戯曲『ジャンヌ・ダルク』の創作へと向かった。また、1940年代に『アンティゴヌ』を執筆したジャン・アヌイは、「ジャンヌ・ダルクはキリスト教のアンティゴヌである」というドンクール神父の言葉を聞いて²⁾、1953年にジャンヌを主人公とする『ひばり』を舞台にかけた。次のジャン・コクトーの言葉は、2人の女性像が作家の精神において重なり合っていることを示す。

ジャンヌ・ダルクは私の偉大な作家である。形式においても内容においても、彼女より優れた表現を行う者はいない。おそらく彼女は色褪せ、ある文体に落ち着いてしまうだろう。ありのままの彼女、それは文体そのものだ。私は彼女の裁判を何度も読み返す。アンティゴヌは私のもうひとりの聖女である。権威に抵抗する2人の女性は、私が愛する荘重さに適合している³⁾ […]

王令に背いて兄の死体を埋葬したために生埋めの刑を宣告されるアンティゴネーは、ジャンヌ・ダルクと同様、あるいはそれ以上に数多くの文学作品の題材となっている。ジョージ・スタイナーは『アンティゴネーの変貌』において、新たな歴史的状況に直面した作家たちが、新しい物語を編み出すのではなく、アンティゴネーの悲劇に立ち返るのはなぜなのかと自問する。

1961年に筆を取ったロルフ・ホッフホフトは、1943年春と夏のベルリンにおける悪夢のような生活環境を思い起こさせようとした。数えきれないほどの実話や、象徴的な物語の可能性があったはずだ。『ベルリンのアンティゴネー』というその題名が告げるように、出来上がったのは、100番目の、200番目のソフォクレス変奏曲であった。もう一度尋ねよう。どうしてこうなのか⁴⁾。

西欧の文学的想像力は、アンティゴネーの悲劇をはじめとする古代ギリシャの物語を繰り返し模倣し、反復してきた。確かに西欧文学も、ハムレットやドン・キホーテ、ファウストのような典型的人物を生み出した (*Ibid.*, p. 144)。しかし、ハムレットとドン・キホーテに関して言えば、その翻案の数は、オイディプス、オデュッセウス、アガ멤ノン、オレステス、メディアなどには遠く及ばない。また、スタイナーは、ファウストの増殖力がギリシャ神話の人物たちに匹敵するとしても、この人物が「プロメテウスという原型のキリスト教版」にすぎないこと

2) Jean ANOUILH, « Une inexplicable joie » (« L'Avant-Scène Théâtre », octobre 1964), *Théâtre II*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 1252.

3) Jean COCTEAU, *La Difficulté d'être* [1983], Édition du Rocher, 2003, p. 36-37.

4) George STEINER, *Les Antigones* [1984], Traduit de l'anglais par Philippe Blanchard, Gallimard, 1986, p. 136.

を指摘する (*Ibid.*, p. 145)。

ジャンヌ・ダルクが繰り返し文学作品に描かれることは、アンティゴネーとの相似性に重要な鍵があるのではないだろうか。ジャンヌの物語は、アンティゴネーの悲劇が何度も変奏され、繰り返される大きな流れの中のひとつの支流を形成すると考えることができる。

ギリシャ神話を起源とする人物たちが、西欧文学において圧倒的な存在感を持つことについて、スタイナーは説得的な説明を行っている。それは、古代ギリシャにおいて言語と神話は同時に生まれ、持ちつ持たれつの関係で発達してきた、という考えに基づいている。

自然界と社会における私たちの精神的経験とそこにおける私たちの存在の諸要素を、ギリシャ語と、この言語から私たちが譲り受けたものが意味付け、抽象化し、象徴化し、類型化し、比喩化する際のさまざまな形態がある。その形態のうち多くは、特定の重要な神話と不可分であるように思われる。意味のコード化や、私たちの思考と感性における諸文法の表現手段が最も明快に分析されるのは、これらの神話と密接に結合させた場合である。
(*Ibid.*, p. 150)

スタイナーによると、現代のインド・ヨーロッパ系の構文構造は、ギリシャの古代文法と比べて目立った違いはない。古代ギリシャ人からその言語を引き継いだ西欧人は、言語とともに発展してきた神話体系もまた引き継いだ。文法や修辞のそれぞれの要素は、古代ギリシャにおいて、ある神話と同時に生まれ、発達したものであるため、その神話と関連させた場合に最も生彩を放つ。例えば、文法的「格」の進化は、オイディプス神話などの「不確かなアイデンティティー」を扱うドラマと切り離すことができない。「記憶の女神」ムネーモシユネーは過去形に、プロメテウスは未来形に対応する。ナルキッソスには一人称単数の領域が当てられる (*Ibid.*, p. 151-152)。一方、後にヨーロッパ文明が生み出した物語は、それを語り、伝える言語の様式に対して、ギリシャ神話が持ちえたほどの密接な関係を持つことはない。結果として、神話に匹敵するような自己増殖力や変容力を持つこともないのである。

アンティゴネーは、劇において対立するクレオンとともに「アンティゴネー＋クレオン」構文法を形成する。現実世界において、若者と大人の対立、正義と法の衝突が繰り返されるたびに、人々はそれを表現するための「言葉、イメージ、論法、提喩、文彩、譬喩」をこの文法から汲み取るのである (*Ibid.*, p. 153)。

西欧文学におけるジャンヌ・ダルクの回帰性を、アンティゴネーとの類縁関係により説明することはある程度の説得力を持つ。しかし、ジャンヌは歴史上実在した人物であるという点で、アンティゴネーとは決定的に異なっている。スタイナーは『アンティゴネーの変貌』において、ギリシャ神話の人物と対置するために、ハムレットやドン・キホーテ、ファウストなどの名を挙げるが、アンティゴネーとの比較が有効であるはずのジャンヌ・ダルクについては、バーナード・ショーの『聖女ジャンヌ』に言及するのみで、2人の女性像についての比較的考察を深めることはない⁵⁾。ジャンヌは特定の文学作品から生まれた虚構の人物ではなく、歴史上の人物であるために、スタイナーの「文学的考察」から漏れてしまうのではないだろうか。

ジャンヌをめぐる文学作品について、創造の源泉を辿ってゆくと、処刑裁判記録に行き当たる。裁判記録によって実在性を保証されるジャンヌは、アンティゴネーのような神話的人物と

5) ショーの戯曲への言及は2度 (165-6頁と254頁) なされる。305頁では「ジャンヌ・ダルクの東の間の異端放棄」が簡潔に触れられる。

も、ハムレットのような虚構の人物とも一線を画する。

ジャンヌは生きた伝説である、とミシュレは言った。しかし、彼女を伝説に仕立ててしまうことには警戒する必要がある。すべては実証可能なのであるから。ある歴史上の人物について、2年間というその公的生活の短さ——そこには牢獄で過ごした12ヶ月が含まれる——にもかかわらず、これほどの証言が集められたことはない。詩人や劇作家たちが彼女の冒険を虚構の逸話で飾ろうと大いに努力したが無駄であった。核心は手つかずのままである。死刑執行人たち自身がジャンヌに永遠の栄光を授けることを、歴史のアイロニーは望んだ。ヒロインの永続性を保証したのは彼女の裁判である。裁判は誘導され、不公平であったが、公証人たちによってその記録原簿が作成された⁶⁾。

1840年代にキシュラが裁判記録を出版したことにより、ジャンヌは伝説の領域から歴史的現実の領域へと導き出された。バーナード・ショーが指摘するように、それを契機に彼女への関心が高まり、その文学的表象も変化した。

それまで、乙女の文学的表象は伝説的なものであった。しかし1841年、キシュラによって処刑裁判と復権裁判の記録が出版されると、この主題は新たな視野のもとに置き直された。すべて真実であるこの文書は、ヴォルテールのホメロスの模作やシラーのロマン主義的不条理には寄せられることのなかった強い関心を、ジャンヌに対して引き起こしたのである⁷⁾。

裁判記録は、現実世界を生きた、生身の人間としてのジャンヌ像を伝える。しかし、まさにこの裁判記録が、権威に立ち向かうジャンヌの姿を浮かび上がらせ、神話的人物であるアンティゴネーとの比較を可能にしたのである。

ルーアンでの裁判の記録がジュール・キシュラの手で刊行されると、2人の関連性はさらに明白になった。暴君を前にしたアンティゴネーは、判事たちを前にしたジャンヌである。コーションの先駆者としてのクレオン。なんと見事な対比であろう⁸⁾！

19世紀半ば以降、裁判記録が編纂・公刊され、ジャンヌ・ダルクはより現実的な存在となったが、それと同時に、アンティゴネーとの相似性が認識されるようになった。それが、ジャンヌが文学的創造において特別な存在感を持ちえたことの大きな理由であると考えられる。

次章において、ジャンヌ裁判記録の来歴を概観した後、続く第3章と第4章では、法廷で裁かれるジャンヌを素材とする創作がどのように行われ、また、どんな問題をはらむかを考察する。

6) Simone FRAISSE, « Jeanne d'Arc », dans P. Brunel dir., *Dictionnaire des mythes littéraires*, Éditions du Rocher, 1988, p. 849.

7) Bernard SHAW, *Sainte Jeanne* [1924], « Préface », Texte français Anika Scherrer, L'Arche, 1997, p. 37.

8) Simone FRAISSE, *Le Mythe d'Antigone*, Armand Colin, 1974, p. 47.

2. ジャンヌ処刑裁判記録の成立

処刑裁判記録は500年以上の時を経て、現代まで伝わっている。以下に、裁判記録成立の経緯について、ピエール・ティセが編纂した『ジャンヌ・ダルク処刑裁判』第1巻に付された説明⁹⁾を要約したい。

裁判法廷におけるジャンヌの供述や、裁判官や陪席判事による審議は、公証人のギョーム・マンションとギョーム・コル（別名ボワギョーム）によってフランス語で記録された。1431年2月21日からの予備審理の記録を浄書して作成された調書を、3月24日の審理においてマンションが朗読し、ジャンヌは若干の訂正すべき箇所を除いて記録内容を受け入れた。5月30日の戻り異端判決に至るまで、法廷での審問・答弁と審議はすべて記録された。これが処刑裁判記録の「フランス語原本minute française」である。その後、ジャンヌの処刑から20年以上を経た1455年12月15日、ジャンヌ復権裁判の検事の求めに応じて、マンションは「フランス語原本」を判事たちに提出した。そしてこの原本は消失する。

しかし、「フランス語原本」に基づいた「ラテン語記録」が、ジャンヌ処刑から4年ほど経った1435年頃に作成されていた。処刑裁判において陪席判事を務めたトマ・ド・クールセルと公証人ギョーム・マンションは、法廷の審理記録をラテン語に訳し、さらに、書簡などの裁判に関連する資料を加えた「裁判記録」を編纂した。この「ラテン語記録」の原簿から5部の写本が作成され、裁判関係者らに送付された。原簿と写本5部のうちの2部は消失し、現存するのは3部の写本のみとなる。消失した2部の写本のうち1部は、1455年のジャンヌ復権裁判の際に、記録内容が法廷でのジャンヌの供述と異なっているとして廃棄された。前述したように、「フランス語原本」もまた復権裁判の判事らの手に渡った後に消失したが、これも同様の理由により廃棄された可能性がある。

「ラテン語記録」の現存する写本3部のうち1部は、裁判責任者であるボーヴェー司教ピエール・コーションに宛てられたと推定されるもので、「写本A」と呼ばれる。犢皮紙119葉からなり、他の2部と比べて裁判記録のより完全なかたちを留めている。現在はパリ国民議会書庫に所蔵される。「写本B」と「写本C」は、いずれもパリ国立図書館に保存され、それぞれ169枚と220枚の普通紙を用いた写本である。多数の誤記を含む「写本C」に対し、「写本B」には、数人の書き手による数多くの削除や加筆の痕があり、原簿との照合が厳密に行われたことを示している。19世紀にキシユラが、20世紀にシャンピオンとティセがそれぞれ刊行した『処刑裁判記録』の校訂版は、いずれも「写本B」に基づいている。

「フランス語原本」が消失した以上、ジャンヌが法廷においてフランス語で語った言葉を復元するには、この「ラテン語写本」を媒介とするしか方法はないことになる。ところが、「フランス語原本」から手写されたと推定される「フランス語写本」2点が近代になって発見された。「ユルフェ写本」と「オルレアン写本」である。

処刑裁判記録の「フランス語原本」は復権裁判の法廷に提出され、復権裁判記録の中に全面的に転写された。こうして作成された復権裁判記録の原本は消失したが、15世紀後半にその原本から写された写本が、不完全なかたちではあるが現存している。一方は、1787年、クロード・ドゥラヴェルディにより、クロード・デュルフェ（1502～1558）の蔵書から発見されたため「ユ

9) Pierre TISSET et Yvonne LANHERS, *Procès de condamnation de Jeanne d'Arc, Tome 1 (Texte)*, Société de l'Histoire de France, Sciences Humaines, 1960, p. XIX-XXVI.

ルフェ写本」と呼ばれる犢皮紙294葉である。この写本を検討したキシユラによると、これは処刑裁判記録「フランス語原本」からの写本と推定されるが、冒頭部分が失われて3月3日の審理途中から始まっており、また、記録の順序が入れ替わっている箇所がある。「ユルフェ写本」が16世紀に補修されたとき、欠落箇所が「ラテン語記録写本A」に基づいた写本により補われた。よって発見された時点では2種類の筆跡が混在していた。

もう1点の「フランス語写本」は、オルレアン市立図書館に所蔵される「オルレアン写本」(普通紙307枚)である。16世紀初めに作成されたこの写本は、「ユルフェ写本」あるいは「ユルフェ写本」の基になったフランス語記録を写したものである。「オルレアン写本」にも多数の欠落や欠陥があるものの、現存する「ユルフェ写本」に欠けている審理の冒頭部分を含んでいる点で貴重な史料である。

これらの写本を基に、現在までフランスでは主に3点の『処刑裁判記録』校訂版が刊行されてきた。1840年代のジュール・キシユラ版、1920年代のピエール・シャンピオン版、1960年代のピエール・ティセ版である。また、これらの校訂版の刊行と並行して、ジャンヌ・ダルク裁判の簡略化された記録や欠陥の多い翻訳なども数多く出版されるようになった。つまり、19世紀から20世紀にかけて、確かに歴史研究は進歩し、確実な校訂版が作成されるようになったが、だからといって、ジャンヌ裁判の審理過程や答弁のより正しい姿が認識されるようになったとは言いきれないのである。

ところで、『処刑裁判記録』校訂版は、どの程度まで事実を伝えていると判断できるだろうか。1940年代にジャンヌ裁判についての戯曲を創作したクロード・ヴェルモレルは、1431年の処刑裁判も、1455年からの復権裁判も、真実を解明するために行われたものではないと言う。

ジャンヌ・ダルクについては、2つの裁判の記録を除けば、確かな記録はほとんど残されていない。2つの政治的な裁判。始めの裁判は彼女を糾弾するため、次の裁判は前判決を破棄するために開かれた。いずれも真実を解明するためではなかった¹⁰⁾。

一方、神学者のジャン・ギトン¹¹⁾は、裁判記録がジャンヌについての「疑う余地なく正確な写真」を提供すると述べる。例えばイエス・キリストの言葉は、「朗唱者たちの記憶」を介して伝えられたのに対し、ジャンヌは「生真面目な精神」の判事たちによって裁かれ、その言葉は「たぐい稀な確実性」をもって記録された。国民議会で行われるように、記録が発言者の手で修正されることもなかったのである¹¹⁾。

この2人のように、裁判記録が伝える事実の正確さについて人々はさまざまに評価するが、客観的な判断を下すことは不可能である。それでも本稿では、以下のシモーヌ・フレスの立場を受け継いで、裁判記録は大筋において、ジャンヌの姿を正しく伝えているものと考えている。

1450年にルーアンを奪還した直後、シャルル7世が望んだ復権裁判——むしろ有罪判決取り消しの裁判と言うべきか——は、1456年に起こされた。その裁判はジャンヌを復権するよりも、1431年の判事たちの違法性を糾弾した。しかし、復権裁判で援用された115の証言

10) Claude VERMOREL, « Jeanne et son temps », *Études cinématographiques, Jeanne d'Arc à l'écran*, n°^{os} 18-19, automne 1962, p. 5.

11) Jean GUITTON, « Entretien avec Robert Bresson et Jean Guitton », *Études cinématographiques, Jeanne d'Arc à l'écran*, p. 86.

は、1431年の裁判から引き出されるイメージの正しさを裏付けた。[…] 正直で、勇敢で、一徹で、良識を備え、速やかに応答するジャンヌのイメージである¹²⁾。

3. 異端放棄の真相

ジャンヌ・ダルク処刑裁判記録は、何度も消滅の危機に直面しながらも、度重なる転写の作業を経て現代に伝わっている。ジャンヌの答弁を忠実に伝えているという保証はないが、それでもこの記録は、「伝説の少女戦士」に代わる、より現実味を帯びたジャンヌ像を提示する。1840年代に最初の『裁判記録』校訂版がキシュラにより刊行されると、「法廷で裁かれるジャンヌ」に人々の関心が集まってゆく。1920年代以降はその傾向が顕著で、故郷ドンレミで「声」を聞く場面や戦闘の場面よりも、1431年の裁判を扱った文学作品が数多く創作されるようになる。本章では、それらの作品から主だった3つの戯曲を選び、裁判記録と比較しながら、ジャンヌ処刑裁判をめぐる文学的創造の特徴を浮かび上がらせたい。

ジャンヌ処刑裁判を題材とする作品において、それぞれの作家による独自の解釈や問題意識が最も際立つのは、ジャンヌが一時的に過ちを認め、異端放棄を宣言する場面である。よってこの場面に着目して、バーナード・ショー『聖女ジャンヌ』、ジャン・アヌイ『ひばり』、ペルトルト・プレヒト『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431年』を順に取り上げ、続いて裁判記録の最新の刊本であるティセ版の該当箇所を検討する。

ショー『聖女ジャンヌ』

バーナード・ショーの『聖女ジャンヌ』では、ジャンヌは聖女カトリーヌのお告げを信じて、裁判の末に解放されると思っている。しかし、死刑執行人が登場し、破門と火刑の危険が身に迫っていることを悟ると、彼女は恐怖にとられる。

ラドヴニユ 火刑台は準備できましたか。

死刑執行人 はい。市場広場に。イギリス人たちが台をあまりに高く作ったので、私が近づいて楽に死なせることもできません。無惨な死に方になるでしょう。

ジャンヌ [恐れおののいて] あなた方は私を今すぐ火あぶりにするわけじゃないでしょ？

異端審問官 ようやくわかってくれたね¹³⁾。

続いてコーションやラドヴニユらの陪席判事に説得されると、ジャンヌは自分が「声」に欺かれたこと、悪魔にそそのかされていたことを認める。

ラドヴニユ [断固として言い張る] コンピエーニュできみが捕われて以来、「声」はきみとの約束をひとつでも守ったかい？ 悪魔がきみを裏切ったのさ。でも教会はきみに両腕を広げている。

ジャンヌ [絶望して] そうですね、本当に。「声」は私を騙した。悪魔が私を弄んだ。もう何も信じません。今まで無茶もしたけれど、火刑台に飛び込むなんて正気の沙汰じゃ

12) Simone FRAISSE, « Jeanne d'Arc », dans *Dictionnaire des mythes littéraires*, p. 850-851.

13) Bernard SHAW, *Sainte Jeanne*, p. 190.

ない。(Ibid., p. 191)

こうしてジャンヌが自らの罪を認め、悔悛の誓約書に署名すると、異端審問官が終身禁固刑の判決を言い渡す。孤独な瞑想によって過誤を悔い改め、二度と同じ過誤に陥らないためである。ところがこの判決は、ジャンヌが期待したものではなかった。彼女は、罪を認めれば自由の身になれると思っていた。

ジャンヌ 〔落胆して立ち上がる。激怒して〕終身禁固刑！ それじゃあ私は自由にはなれないのね！（Ibid., p. 195）

そしてジャンヌは、暗い牢獄での生よりも火刑台での死を選ぶ。彼女にとって、木々を渡る風や、ひばりや子羊の鳴き声、天使たちの「声」を運ぶ教会の鐘の音が聞こえないならば、その生は生きるに値しない。ジャンヌは、「声」は正しかったという信念とともに火刑台へと向かう。

アヌイ『ひばり』

ジャン・アヌイは『ひばり』の創作にあたってショーの『聖女ジャンヌ』を参照しているため、異端放棄の場面においても共通の要素が認められるが、アヌイの作品では「声の聞こえなくなったジャンヌ」の孤立がより強調されている。ジャンヌはコンピエーニュでブルゴーニュ派のリュクサンブル公に捕えられ、イギリス側に売り渡されて以来、聖女や天使が伝える神のお告げの「声」を聞いていない。それでも裁判の間、かつて聞こえたはずの「声」を信じて判事たちに抵抗し、異端放棄を宣言することを拒否し続ける。ところが、異端審問官がジャンヌの破門を要求し、世俗の裁きに委ねることを求めた後、彼女は「声」に対する確信を失ってゆく。ジャンヌを破門の危機から救いたいと願うコーションは、彼女の心境を察し、次のように代弁する。

コーション 告解をして、罪を悔い改め始めたら、聖体の秘跡を授けよう。お前がただ「はい」と言えばさえないのさ。お前は勇敢だ。私たちは皆それを知っている。でも、お前の肉体はまだ柔らかい。死ぬのが怖いんじゃないか？

ジャンヌ 〔穏やかに〕はい、私は怖い。でもそれがどうだと言うの？

コーション ジャンヌ、私はお前のことをよく知っているから、お前が死の恐怖くらいでは自説を撤回しないことはわかっている。でも、お前は別の、もっと大きな恐怖に怯えているはずだ。過ちを犯したという恐怖。思い上がりや強情から、永遠の劫罰に身をさらすという恐怖に¹⁴⁾。

続いてコーションによる説得を受け入れたジャンヌは、異端放棄の宣誓書に署名の代わりに十字を記す。字を書けないためである。その後、牢獄でひとりになったジャンヌは、大天使ミカエルと2人の聖女に次のように語りかける。

ジャンヌ 〔独白〕聖ミカエル様、聖女カトリーヌ様、聖女マルグリット様、あなた方も

14) Jean ANOUILH, *L'Alouette* [1953], *Théâtre II*, p. 71.

う私に話しかけてはくださらないのですか。イギリス人たちに捕えられて以来、どうして私をひとりきりにしておかれるのですか。あなた方は私を勝利に導いてくださいました。でも、つらいときにこそ、あなた方が必要だったのです。[…]

結局、私は思い上がっていただけなのでしょうか。結局、私が全部でっち上げただけなのでしょうか。[…]

[誰も答えない。彼女はつぶやく。]

この物語は私が背負うには大きすぎた…… (Ibid., p. 81)

ジャンヌの呼びかけに「声」が応えることはないため、彼女は、「声」は自分で作り上げた幻だったのではないかと自問する。しかし、牢獄を訪れたウォリックと言葉を交わすうち、彼女は新たな確信へ至る。

神様、あなたは沈黙していらっしゃいました。その間、聖職者たちが一齐に話し出して、彼らの言葉ですべてをもつれさせました。でも、あなたが最初に聖ミカエル様を通して私にお伝えくださったように、あなたが沈黙なさっているとき、それは、あなたが私たちを最も信頼しているとき。すべてを私たちにお任せくださるときです。(Ibid., p. 84)

ジャンヌは、「声」の聞こえない状態、つまり神の沈黙こそが、神が自分を最も信頼している証左であることを思い出す。そして異端放棄を撤回し、自らの意志で火刑を選択する。

ブレヒト『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431年』

ベルトルト・ブレヒトの『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431年』では、法廷での審理と並行して、イギリス軍占領下のルーアンの民衆が裁判に関心を寄せる様子が描かれる。この作品においてジャンヌが異端放棄を宣言するのは、民衆が彼女を忘れて祭日を祝っていると思込み、「声」が聞こえなくなったときである。

エラール師 […][ジャンヌの] 体調はあまりよくない。今は、自分の裁判を民衆がどう思っているかをしきりに尋ねている。動揺しているか、無関心であるかと。仲間たちが何度か彼女と接触しようとしたが、失敗に終わった。彼女は「声」が聞こえないせいでとても心配している¹⁵⁾。

ジャンヌが聞く「声」は民衆との連帯感を反映したものであるため、民衆から忘れ去られたと思い落胆するジャンヌは、「声」を聞くこともできない。彼女は異端放棄の宣誓書に署名すると、「声」に騙されていたことを認める。

ポーペール 「声」はお前を過ちへと誘導したのだ、わが子よ。

ジャンヌ はい。「声」が私を欺いたことがわかります。(Ibid., p. 240)

ところが、ジャンヌの異端放棄を知ったルーアンの住人たちは、イギリスの支配に抗して蜂起

15) Bertolt BRECHT, *Le Procès de Jeanne d'Arc à Rouen, 1431*, Texte français Claude Yersin, *Théâtre complet, Tome 7*, L'Arche, 1994, p. 238.

する。彼らは波止場に集合してイギリスの水夫と乱闘し、イギリス軍の衛兵所を襲撃する。そのことを知ったジャンヌは、民衆との連帯を再確認すると同時に、再び「声」を聞き始める。そして、一旦は脱ぎ捨てた男の服を再び身に付け、司教コーションに向かって異端放棄を取り下げる。

ジャンヌ […] 私は火あぶりの恐怖から前言を取り消しただけです。でも、戦場で私は火を怖れませんでした。ひとりじゃなかったから。私のまわりに仲間がいたから。私はただ、民衆を疑ってしまったのです。私が死ぬというのに、彼らは気にも留めず、酒盛りをしていると思って。でも彼らはずっと、私のことを全部わかってくれていた。だから何ひとつ無駄ではなかった。(Ibid., p. 245-246)

ジャンヌは、自分の死後にフランスがイギリスの支配から解放されることを確信しながら、ルーアンの市場広場にて火刑に処される。

裁判記録における異端放棄の場面

以上のように、作品によって異なる解釈がなされるジャンヌの異端放棄は、裁判記録全体の中で最も謎めいた場面のひとつとなっている。それは、1431年5月24日の出来事である。5月23日までの審理の結果、破門を宣告されたジャンヌは、24日、第1回判決言い渡しのためにルーアン市立サン・トゥーアン修道院附属墓地に召喚される。多数の陪席者を前に、台の上に立たされたジャンヌに向かって、神学博士ギョーム・エラルが説教を行い、その言動における過誤を認めるよう勧告するが、彼女は従わない。ところが、司教コーションが最終判決の朗読を始めると、ジャンヌは自ら悔悛を述べ始める。

その後、最終判決が読み上げられると、ジャンヌは口を開き、判事たちが彼女に命じ、教会が判断することすべてを守り、全面的に彼らの命令や意向に従いたいと言った。そして、前述した大勢の列席者を前にして、彼女は前言を撤回し、異端放棄を述べた。ジャンヌは数度にわたり、聖職者たちが彼女の御公現や啓示を支持することも信じることができないと言うのなら、彼女もそれらを支持せず、すべてにおいて判事と聖なる母、教会に一任すると述べた。

Et après ce, comme la sentence fut encommancée a luire, elle dist qu'elle vouloit tenir tout ce que les juges et l'Eglise voudroient dire et sentencier, et obeir du tout a l'ordonnance et voullenté d'eulx.

Et alors, en la presence des dessusdiz et grant multitude de gens qui la estoient, elle révoqua et fist son abiuracion en la maniere qui ensuit.

Et dist plusieurs fois que, puisque les gens d'Eglise disoient que ses apparicions et revelacions n'estoient point a soustenir ne a croire, elle ne les vouloit soustenir ; mais du tout s'en rapportoit aux juges et a nostre mere Sainte Eglise¹⁶⁾.

この悔悛の言葉に続いて、裁判記録には「ジャンヌ悔悛の誓約書」が掲載される。50行ほどの

16) Pierre TISSET, *Procès de condamnation de Jeanne d'Arc, Tome 1 (Texte)*, p. 388. 以下、裁判記録から引用する場合は、原則として古フランス語テキストを参照する。

文書の末尾にJEHANNEという署名と十字の記号が付されている。

前章の最後で、本稿では、裁判記録は原則として事実を伝えているものと判断すると記した。しかし、この悔悛の場面については、記録が出来事を忠実に伝えていない可能性が高い。多くの陪席判事たちが、このときジャンヌに読み聞かせられた誓約文は大文字数行程度の短いものであり、裁判記録に掲載されている誓約書とは異なることを復権裁判において証言したからである¹⁷⁾。そもそもジャンヌは文盲であったため、読み聞かせられた文言と、誓約書に記された内容の同一性を確認することは不可能であった。

誓約書の文言にまつわる疑惑に加えて、ジャンヌが署名に添えた十字の記号もまた、この場面についての謎を深め、解釈の可能性を拡大する。3月1日の第5回予備審理において、彼女はどのように答弁した。

ジャンヌは自分の手紙に、十字の記号と一緒にイエズス、マリアという2つの名前を記す習慣があったかと問われ、記したものもあるし、記さなかったものもある。彼女が手紙を書いている味方の兵士が、彼女がそこに書いたことを実行しないようにさせるため、十字の記号を記したことがある、と答えた¹⁸⁾。

ジャンヌは、口述筆記させた手紙に十字の記号を記して、その手紙に書かれた命令を実行しないよう兵士たちに指示していた。もし、悔悛の誓約書に記した十字の記号も否定の意味を持つとすれば、この場面でもなお、異端悔悛を拒否していたことになる。

謎に包まれた悔悛の場面について、すでに取り上げた3作品はそれぞれ独自の解釈を提示しているが、それでも、ジャンヌが一時的にせよ自分の意志で異端放棄を決意し、その背景に「声」への疑い、あるいは「声」の沈黙があったとする点で一致している。しかし裁判記録を読む限り、5ヶ月に及ぶ裁判の間、ジャンヌは一貫して「声」を聞き続けたようである。少なくとも、彼女はそのように認識していた。法廷においてジャンヌは何度も「声」に言及するが、ここでは3カ所のみ引用する。

2月27日

ジャンヌが部屋 [= 独房] に戻ったとき、「声」が何と言ったかを尋ねられ、彼女は答えた。「声」はあなた方に勇敢に答弁せよと言いました。

Interroguee qu'elle dist quant elle fut retournee a sa chambre :

Respond : Que vous respondisse hardiment¹⁹⁾.

3月12日

主のお恵みに関して、天使は彼女を裏切らなかつたかと尋ねられ、ジャンヌは答えた。

天使は毎日私を励ましてくれるのに、どうして裏切ることがあるでしょう。彼女は、この励ましは聖女カトリーヌと聖女マルグリットからのものだと考えている。

17) 高山一彦『ジャンヌ・ダルクの神話』講談社現代新書、1982年、135頁。

18) Pierre TISSET, *Procès de condamnation de Jeanne d'Arc, Tome 2 (Traduction et note)*, 1970, p. 82. 第1巻の古フランス語テキストに、この箇所該当する部分が欠落しているため、第2巻の現代フランス語訳から引用した。

19) Pierre TISSET, *Procès de condamnation de Jeanne d'Arc, Tome 1 (Texte)*, p. 70.

Interroguee se, es biens de grace, l'ange luy a point failli :

Respond : Et comme me faudroit il, quand il me conforte tous les jours ? Et enctend cest confort, que c'est de sainte Katherine et sainte Marguerite. (*Ibid.*, p. 122)

5月9日

ジャンヌは言った。彼女が「声」に向かって、彼女が火あぶりになるのかと尋ねたところ、「声」は彼女に、わが主に期待しなさい、わが主が助けるだろう、と答えた。

Item dit qu'elle a demandé a ses voix s'elle sera arse, et que lesdictes voix luy ont respondu que elle se actende a nostre Sire ; et il luy aidera. (*Ibid.*, p. 349-350)

裁判記録からは、「声」に対するジャンヌの不信を読み取ることはできない。彼女は「声」に対して従順であり続けるが、ある日、唐突に異端放棄の宣言をする。しかしすでに指摘したように、この異端放棄の真偽のほどは明らかではない。

確かに、ジャンヌ処刑裁判に取材した文学作品が、裁判記録の忠実な再現を目指すとは限らない。むしろ作家は、創作の源泉にある素材を独自の視点から解釈し、自らの作品世界に取り込むものだろう。それでも、「法廷で裁かれるジャンヌ」を描いて一定の評価を得た20世紀の3人の作家（ショー、アヌイ、ブレヒト）がいずれも、裁判記録から伝わる事実に反して、「声」に見捨てられたジャンヌ像をクローズアップしていることには、やはり何らかの意味があるのではないだろうか。この問いに答える前に、ジュール・ミシュレによるジャンヌ像を検討したい。

ミシュレ『フランス史』

ミシュレは『フランス史』第5巻(1841)の中の2章をジャンヌ・ダルクの生涯にさいている。ジャンヌの法廷での供述を、ピュシヨンの『乙女の年代記と裁判²⁰⁾』から数多く引用しつつも、ミシュレが提示するジャンヌ像は作者の想像力によって構築された部分が多い。

ミシュレによると、ジャンヌは4月18日、ルーアンの人々が復活祭を祝う中、牢獄でひとり病に苦しんでいた。キリスト教の祝祭から排除された孤独感に耐えきれず、「声」を否定したいという欲求が彼女の心に生まれる。

ああ、どうして、これほど必要としているときに彼らは稀にしかやって来てはくれないのか。どうして、聖女たちの慰めに満ちた顔は、もはや薄暗い光の中にしか現れず、日に日に色あせてゆくのか…… あれほど約束された解放はなぜ訪れないのか…… 囚われの女がこれらの問いを頻繁に自問していたことは疑いえない。また彼女が、聖女や天使たちと、声をひそめて穏やかに論争していたことも疑いえない。一体、約束を守らない天使が、本当に光の天使なのだろうか…… このような恐ろしい考えが彼女の胸をよぎらなかったことを願おう²¹⁾。

20) BUCHON, *Chroniques et procès de la Pucelle*, 1827. ピュシヨンが参照した裁判記録は「オルレアン写本」である。Pierre MAROT, « Avant-propos », dans Pierre TISSET, *Procès de condamnation de Jeanne d'Arc, Tome 1 (Texte)*, p. X.

21) Jules MICHELET, *Jeanne d'Arc*, Perseides Éditions, 2004, p. 117.

ミシュレは牢獄におけるジャンヌの孤独な闘いを想像する。彼女が法廷で追いつめられるほどに、「声」はますます遠のいてゆく。

裁判記録やその他の史料に依拠することなく、ミシュレが創作したこの場面には、すでに取上げた文学作品との類似点が見いだされる。ここでミシュレが想像する聖女や天使との論争——応じてはもらえない孤独な論争——は、アヌイの『ひばり』において、ジャンヌが大天使ミカエルと2人の聖女に語りかけ、返答を得られない場面として具現化されている。また、牢獄に幽閉されたジャンヌが、外界の祝祭的な雰囲気のできより孤独感を強める姿は、ブレヒトの『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431年』において、民衆との連帯感を失い絶望するジャンヌ像を連想させる。さらに、ミシュレが「約束を守らないような天使が本当に光の天使だろうか」と表現するジャンヌが持ちえた疑惑は、ショーの『聖女ジャンヌ』において、より断定的に表現される。——「声」は私を騙した。悪魔が私を弄んだ。もう何も信じません。

20世紀の3人の作家たちが描く「声に見捨てられたジャンヌ」の原型を、一次史料である裁判記録の中に見いだすことはできない。それは、ミシュレの『フランス史』から立ち上がる人物像である。この比較検討の結果から、どんな結論が導き出されるだろう。作家たちの創作の源泉には、裁判記録ではなくミシュレの著作があったと考えるべきだろうか。

確かにミシュレの著作が後の文学的創造に与えた影響は大きいようで、アヌイは『ひばり』の創作にあたって、裁判の資料としては『フランス史』のみを参照したとされている²²⁾。しかし、ショー、アヌイ、ブレヒトの3人に対するミシュレの影響力を強調するよりも、この4人の作家たちが共通して「声の聞こえないジャンヌ」を求める感性を持っていたと考えるほうが妥当ではないだろうか。19世紀半ば以降の文学作品²³⁾において、「声」を一貫して聞き続けるジャンヌは物語の主人公たりえない。ジャンヌが「声」を疑い、人としての弱さに陥ることこそが、近現代における文学の成立要件なのではないだろうか。

4. 少女の「裏切られた遺言」

19世紀半ば以降、裁判記録の編纂・刊行と並行して、文学作品においても法廷で答弁するジャンヌが描かれるようになった。それは、従来の伝説的で牧歌的なジャンヌ像に代わる、より具現的な、生身の人間としてのジャンヌである。とはいえ、ジャンヌ処刑裁判を題材とする作品が、出来事よりも忠実な表象を目指すとは限らない。ショー、アヌイ、ブレヒトの戯曲においては、裁判記録には見いだすことのできない、「声の聞こえないジャンヌ」による束の間の悔悛が物語のクライマックスを形成する。裁判記録から浮かび上がる、「声」に従順であり続けるジャンヌを裏切ることによって文学作品が成立するのである。

「声」との約束

ところで、裁判記録が伝えるジャンヌの言葉に耳を傾けるとき、彼女に対するもっと重大な裏切りは、その言葉を裁判記録として公刊したり、それを基に創作したりすること自体である

22) « Notice », *Théâtre II*, p. 1363.

23) ミシュレの著作は文学的要素を多分に含むものであり、引用した箇所は作者の想像力で書かれている。シモーヌ・フレスは「ミシュレはジャンヌの詩を書いた」と述べる。Simone FRAISSE, « Jeanne d'Arc », dans *Dictionnaire des mythes littéraires*, p. 856.

ように思われてくる。というのも、裁判記録において繰り返し描かれるのは、「声」との約束を守るべく黙秘するが、発言を強要されるジャンヌの姿であるからだ。ジャンヌ処刑裁判は、彼女がランスでの戴冠を助けたシャルル7世について、フランス国王としての正当性を否定するという、イギリス側の政治的目論見のもとに進められた。よってジャンヌは法廷で、「声」がフランス国王に与えた啓示の内容を語るよう求められるが、拒絶し続ける。

2月21日

神がジャンヌに与えた啓示については、彼女が自分の国王と見なすシャルルを除けば、誰にも話したり打ち明けたりしていない。たとえ首を刎ねられても明かすことはないだろう。なぜなら彼女は、御公現を秘密にしなくてはならないことを知っているからだ。

しかし、彼女は8日以内にそれを明かすべきか否かを知るだろう。

Mais de revelacions a elle faictes de par Dieu, que jamais elle ne l'avoit dit ne revelé fors a Charles que elle dit estre son roy, et si on luy devoit couper la teste, elle ne les reveleroit, pour ce qu'elle savoit par ses visions qu'elle les devoit tenir secretes.

Mais que dedens huit jours elle sçaura bien si elle les doibt reveler²⁴⁾.

2月24日

真実を述べるのが神の御心になわないと思うのか、と問われ、ジャンヌはボーヴェー司教に答える。

「声」はあることを国王に伝えるよう命じたのであって、彼 [= ボーヴェー司教] にはではない。

Interroguee se elle croit que Dieu soit desplaisant que on dye verité :

Respond a monseigneur de Beauvoys que les voix luy ont dit qu'elle die aulcunes choses au roy et non pas a luy. (*Ibid.*, p. 60)

2月27日

わが主から明かしてよいという許しを得られることについては喜んで答えるが、フランス王に関する啓示については、「声」の許しがなければ答えることはない。

Ce qu'elle aura congié de nostre Seigneur de reveler, elle le dira voluntiers ; mais de ce qui touchera les revelacions, touchant le roy de France, elle ne le dira pas sans congié de sa voix. (*Ibid.*, p. 70)

3月1日

秘密にすると固く約束したことについては、あなたには何も申し上げません。私はある場所で秘密を守ると約束したので、あなたに話せば誓いを破ることになります。

誰と約束したのかを尋ねられ、ジャンヌは答える。

聖女カトリーヌと聖女マルグリットです。それを国王もご覧になりました。

[...] mais de ce j'ay promis tenir bien secret, je ne le vous diray point. Je l'ay promis en tel lieu que je ne le vous puis dire sans moy parjurer.

24) Pierre TISSET, *Procès de condamnation de Jeanne d'Arc, Tome 1 (Texte)*, p. 38-39.

Interrogee a qui elle a promis :

Respond que a sainte Katherine et sainte Margueritte ; et ce fut monstré au roy. (*Ibid.*, p. 88)

3月12日まで、ジャンヌは国王に与えた兆について頑に黙秘するが、13日からは強制に屈して語り出す。

3月13日

ジャンヌは言った。[彼女が国王に与えた]兆とは、天使が国王を承認して、国王に王冠を授け、神のご加護とジャンヌの働きによって、国王がフランス王国を完全にその手中に収めると告げたことであり、また、国王がジャンヌを任務につかせ、つまり彼女に兵士たちを与えることを勧め、そうしなければ速やかに即位したり祝福を受けたりできないと国王に伝えたことである。

[…]

天使はどんな方法で王冠をもたらし、国王の頭上に載せたのか、と問われ、ジャンヌは答える。

王冠は国王の面前で大司教に、つまりランスの大司教に渡されたようだ。大司教はそれを受け取り、国王に与えた。彼女自身もその場にいた。王冠は国王の宝庫に納められた。

Item dit que le signe, ce fut que l'angle certiffioit a son roy en luy apportant la couronne et luy disant que il arroit tout le royaume de France entierement, a l'aide de Dieu et moyennant son labour ; et qu'il la meist en besoingne, c'est assavoir que autrement il luy baillast de gens d'armes, il ne seroit mye si tost couronné et sacré.

[…]

Interrogee en quelle maniere l'angle apporta la couronne, et s'il la mist sur la teste de son roy :

Respond : Elle fut baillee a ung acrevesque, c'est assavoir a celui de Rains, comme il luy semble, en la presence du roy ; et ledit acrevesque la receust et la bailla au roy ; et estoit elle mesmes presente. Et est mise au tresor du roy. (*Ibid.*, p. 133-134)

その後の普通審理において、予備審理の内容を検討したとき、ジャンヌはこの供述が強制に屈してなされたものであると述べる。

3月28日

ジャンヌは言った。国王が受けたお告げについては、裁判に関係ないことであるため、彼女は明らかにしなかつた。国王に与えられた兆について彼女が答弁したのは、聖職者たちに強制されたからであった。

Item dit que, quant au conseil de son roy, pour ce qu'il ne touche point le procès, elle ne l'a point voulu reveler. Et du signe baillé au roy, elle l'a dit, pour ce que les gens d'Eglise l'ont condampnee a le dire. (*Ibid.*, p. 272-273)

法廷でのジャンヌの言葉は、彼女が望んで表現したものではない。裁判記録から伝わるのは、神との約束を守ろうとする彼女のひたむきな姿である。ジャンヌは、法廷のような場で発言す

ることも、それ以前に、フランス兵を率いて闘うことも、民衆の崇拜の対象となることも、自ら望んだわけではなかった。

3月27日

崇拜の対象になったことについて、ジャンヌは言った。彼女の手や服に口づけした人たちもいたが、それは彼女自身がそうさせたり、望んだりしたことはない。それは彼女ができる限り避けさせたことである。

Et de adoracione, dit : Se aucuns ont baisié ses mains ou vestemens, ce n'est point par elle ou de sa volenté ; et s'en est fait garder et comme en son povoir. (Ibid., p. 194)

本稿の第2章で処刑裁判記録の来歴を概観した。裁判記録は消滅の危機を乗り越えて、度重なる転写の作業によって現代まで伝わり、歴史家たちの研究成果により、完全なかたちに近いものが刊行されるようになった。しかし、こうして再構築された裁判記録から伝わるジャンヌの言葉を注意深く辿ってゆくと、逆説的なことに、裁判記録が消滅して、その言葉が封印されることのほうが、彼女自身の意志に沿うのではないかと思われるのである。

クンデラ『裏切られた遺言』

この事態について考察するため、便宜的にジャンヌをあるカテゴリーに分類する。それは、後に公刊されて人々の関心を集めるようになる言葉を、未刊の状態のまま残して死んだ人物というカテゴリーである。そして、ジャンヌと同様、このカテゴリーに含まれるフランツ・カフカの事例を取り上げるため、ミラン・クンデラの『裏切られた遺言』に収められたエッセー「きみ、そこはきみの家ではないのだよ²⁵⁾」を参照する。

カフカは遺言として、自分の作品をすべて焼却するよう唯一の友人であるマックス・ブロートに依頼したが、ブロートはカフカの死後、遺言に反してすべてを公刊した、と一般には信じられている。ところがクンデラはまず、全作品の破棄というカフカの遺志が、ブロートにより捏造された嘘であることを暴く。ブロートは、カフカがガルタという名で登場するモデル小説『愛の魔法の国』などを通して、「全作品の処分を望む」という「カフカの伝説」を作り上げた(*Ibid.*, p. 326)。しかし実際には、カフカの遺言とされている手紙——投函されなかった手紙——によると、カフカは、すでに刊行されていた『判決』、『火夫』、『変身』、『流刑地にて』は再版してもよく、その時点でまだ原稿の状態の『断食芸人』は刊行してもよいと考えていた。そして、廃棄すべきなのは「手紙や日記などの私的な書き物」と「彼自身の判断では最後まで仕上げることに成功しなかった短篇小说と長篇小说」であった(*Ibid.*, p. 307-308)。

クンデラは、カフカが書き物の一部について処分されることを望んだのは、作家としての決断というより、一個人としての羞恥心のためであったと考える。とくに手紙については、公刊されることなどカフカは予期していたはずもなく、彼はただ、「自分の私的な事柄を、他人や、家族や、見知らぬ人々の目にさらしておくことの恥辱(*Ibid.*, p. 313)」だけを案じていた。カフカの羞恥心を尊重せず、すべての手紙を公刊したブロートをクンデラは鋭く糾弾する。

私に言わせれば、ブロートの不謹慎さにはいかなる弁解の余地もない。彼は友人を裏切っ

25) Milan KUNDERA, « Là, vous n'êtes pas chez vous, mon cher », *Les Testaments trahis*, Gallimard, 1993, p. 289-331.

た。彼は友人の意志に反して、その意志の意味と精神に反して、彼が知っていた友人の慎み深い性格に反して行動した。(Ibid., p. 313)

プロートは、カフカの言葉を愛すればこそ、すべてを公刊するべきという正義感に突き動かされていたのだろう。しかしクンデラは、カフカの羞恥心を尊重しなかったプロートは、その作品をも理解していなかったと指摘する。というのも、カフカの小説『審判』は恥辱を主題としているからである。

『審判』の最後の名詞は「恥辱」である。この小説の最後のイメージは、見知らぬ男たちの顔が、Kの顔に触れそうなくらい近づいて、彼の最も私的な状態、つまり臨終の瞬間を観察しているというものだ。最後の名詞と最後のイメージに、小説の根本的な状況が凝縮されている。どんなときでも寝室に人がやって来ること。朝食を食べられてしまうこと。昼でも夜でも、召喚に応じる準備をしておくこと。窓を覆うカーテンを没収されること。会いたい人に会えなくなること。自分が自分のものでなくなること。個人の地位を失うこと。人間の主体から客体への変換。人はそれを恥辱とを感じる。(Ibid., p. 312)

プロートがカフカの手紙をすべて公刊することにより行った私生活の侵害は、『審判』において描かれる状況と本質的に一致している。プロートはカフカの作品を愛しながらも、その精神を理解せず、故人である友人に恥辱を与えた。

ところで、『審判』の主人公Kとまったく同じように、捕虜となったジャンヌ・ダルクは私生活の侵犯を受けていた。牢獄ではイギリス人兵士に監視され、常に法廷への召喚を覚悟し、遂には衆人環視の中で火刑に処された。ジャンヌは「声」との約束を秘密にしたいと望んでいた。そんな彼女が判事たちの強制に屈して供述した言葉を裁判記録として公刊することは、私生活の侵犯を死後にまで引き延ばし、人としての尊厳を陵辱することではないだろうか。

故人が残した言葉に関するこの問題は、視点を変えれば見え方が違ってくる。まず、カフカの時代と同様に、ジャンヌが生きた時代にも、私生活や羞恥が尊重すべき価値であったとは限らない。クンデラは羞恥を「近代のキー概念」と見なしている。

羞恥は近代のキー概念のひとつである。個人主義の時代である近代は、今、こっそりと私たちから遠のきつつある。(Ibid., p. 308)

また、裁判記録が伝えるジャンヌの言葉とジャンヌ自身との関係は、カフカの手紙とカフカ自身との関係とは一致していない。カフカが、その手紙に対して書き手としての直接的な関係を持つものに対して、語り手ジャンヌと裁判記録が伝える言葉の間には、何重にも転写の作業が介在している。そもそも法廷において、ジャンヌが語った言葉の完全なる手写が不可能であったことは確実である。裁判記録が伝える言葉を「ジャンヌの言葉」と見なすことに、どれほどの正当性があるのだろうか。

パスカル『パンセ』に響きわたる「声」

当然のことながら、ジャンヌの法廷での答弁が音声として記録されることはなかった。よって、彼女が実際に語った言葉と裁判記録のテキストとを照合して、記録の正確さを検証するという道は閉ざされている。とはいえ、どの程度かはわからないとしても、ジャンヌの答弁が記

録され、転写されるうちに、書記や写字生の手による何らかの歪曲——書き違い、書き落とし、など——を被ったことは間違いないだろう。裁判記録が伝える「ジャンヌの言葉」は、純粋なジャンヌ個人の言葉ではない。しかし、それ以前の問題として、ジャンヌが法廷で答弁した言葉は、はたして彼女自身によるものだったのだろうか。

ここで、比較のためにパスカルの『パンセ』を取り上げたい。パスカルは後に人々の関心を集めるようになる著作『パンセ』を、未刊の状態のまま残して死んだという点で、ジャンヌやカフカと同じカテゴリーに属している。

塩川徹也氏は『虹と秘蹟 パスカル〈見えないもの〉の認識²⁶⁾』において、『パンセ』の批評校訂の作業を例にとり、テキストについて一般的に認められている前提事項——テキストには作者がいる、テキストには表題がある、など——の根拠を問い直すような思考実験を展開する。

『パンセ』は1670年、パスカルの死後8年を経て、近親や友人たちの手で初めて出版された。一般に「ポール・ロワイヤル版」と呼ばれるこの版の題名は『死後遺稿のうちに見いだされた、宗教その他若干の主題に関するパスカル氏の断想 (パンセ)』であった (*Ibid.*, p. 23)。こうして『パンセ』は題名にパスカルの名前を含んだかたちで公刊されたが、パスカル自身は自分の著作に名前を記すことを望んでいなかった。実際、『プロヴァンシアル』にはルイ・ド・モンタルトという筆名を与えている。もし、パスカルが『パンセ』を自分の手で公刊していたら、作者としてその名前を記すことはなかったと考えられる (*Ibid.*, p. 25)。

その後、「パンセ」の語は題名として定着したが、初版から近代版まで、この題名のもとに刊行されてきたテキストは版によって異なっている。パスカルの自筆原稿は、「大小様々の形態の紙片に書き込まれ、さらにそれらが台紙の上に貼り付けられ、その台紙がアルバム状に綴じ合わされ、最後に装丁されたもの」である。遺品として発見された段階ではこの状態ではなかったが、パスカルの甥が、故人の原稿を保存するために、紙片を台詞に貼り付け、アルバムとした (*Ibid.*, p. 23)。300年以上にわたって数多くの『パンセ』校訂版が刊行されてきたが、版ごとに独自の基準でこれらの断章が整理・編纂されている。また、配列が異なるだけでなく、『パンセ』に含まれる断章は版によって出入りがある。そもそも『パンセ』は遺稿集であるため、内容的に近いものであれば手紙などのテキストも『パンセ』の一部と捉えることができるのである (*Ibid.*, p. 26-27)。

以上のように『パンセ』と呼ばれる書物は、作者名や表題、その書物を形成するテキストと、形態面において保証される自己同一性を備えてはいない。加えて、内容面においても性格規定の困難な書物である。「作者の真摯な信仰をありのままに綴った信仰書」であるのか、「強烈な説得の意志に貫かれた護教論」であるのか、分類すべきジャンルを特定することはできない (*Ibid.*, p. 38)。

こうして『パンセ』が、内容においても形態においても、自己同一性を欠いていることは、パスカルがこの書物を未刊行かつ未完成のまま残したことに起因する。つまり、もともと「オリジナル」が欠けていて、永久に「オリジナル」は実現不可能ということである。この認識から、塩川氏は次の問題を提起する。

しかしこの「オリジナルを実現すること」の原理上の不可能性にもかかわらず、『パンセ』はテキスト校訂への情熱を駆り立て、そのことによってかえってテキストの観念の不可解

26) 塩川徹也『虹と秘蹟 パスカル〈見えないもの〉の認識』、岩波書店、1993年。

さを浮き彫りにする。それはどうしてなのか。いや、そのよって来る原因はさておき、それはそもそもどういうことか、どういう事態なのか。(Ibid., p. 40)

塩川氏によると、『パンセ』の刊本や、自筆原稿、写本、あるいはそのコピーは、「あるべきテキストをおぼろげに示す影」である。それらに触れた読者は、「まだ見ぬ不在のテキストから誘いの呼びかけを聞いてしまった」と感じる。そして批評校訂の新たな試みへと駆り立てられる。ところで、『パンセ』から聞こえてくる呼びかけの「声」とは、パスカルの「声」なのだろうか。

パスカル自身は、『パンセ』の覚書きの主体をなすキリスト教護教論の準備ノートの執筆を思い立ったその時点で、「他者」それも絶対的な他者である神の呼びかけに捉えられたと意識していた節がある。彼は、自らの個我のうちに神が侵入し、彼の声と筆を媒体として、宗教の真理を語り出すように強いられるという体験を持ったのである。(Ibid., p. 41-42)

『パンセ』の断章のひとつひとつには、パスカルが書き留めた神の「声」が響きわたる。テキストはたとえ散乱状態にあるとしても、この「声」によって統一を与えられている。

裁判記録の刊行を契機として、文学作品においても、法廷で権力に抵抗する少女としてのジャンヌ・ダルク像が提示されるようになった。前章で取り上げた3作品は、「声の聞こえないジャンヌ」が異端放棄を宣言した後、自らの意志で火刑を選択する点で共通している。ところが、裁判記録から浮かび上がるジャンヌ像は、「声」に対してひたすら従順であり続け、神との約束を守ることを願っている。

3月31日

[...] ジャンヌは、彼女が裁判でとった行動が、神の命令によるものであることを確信している。彼女が裁判において、神の命令により行ったと承認したことを否定することは不可能である。戦う教会が否定するよう彼女に命じる場合には、彼女は現世の人間には従わず、ただ、わが主にのみ従い、わが主の正しい命令を行うだろう。

[...]

地上にある戦う教会やその判断には従うな、という命令を「声」から受けたのか、と尋ねられ、ジャンヌは答える。

彼女は自分の頭で考えたことを答えているのではない。彼女が答えるのは、「声」が命じたことである。「声」は教会に従うなどは命じていない。わが主に第一に仕えるべきである。

[...] et qu'elle sçait bien ce qui est contenu en son procès, qu'il est venu par le commandement de Dieu ; et ce qu'elle a affirmé ouït procès avoir fait du commandement de Dieu, luy seroit impossible faire le contraire. Et en cas que l'Eglise militant luy commanderoit faire le contraire, elle ne s'en rapporteroit a homme du monde, fors a nostre Sire, qu'elle ne feist tousiours son bon commandement.

[...]

Interroguee s'elle a commandement de ses voix qu'elle ne se submect point a l'Eglise militant qui est en terre, ne au jugement d'icelle :

Respond qu'elle ne respond chose qu'elle prengne en sa teste ; mais ce qu'elle respond, c'est du commandement d'icelles ; et ne commandent point qu'elle ne obeisse a l'Eglise, nostre Sire premier servi²⁷⁾.

ジャンヌが語った言葉は彼女が自分で考えたことではなく、ただ、神の「声」を伝えていたにすぎない。少なくともジャンヌはそう信じ、その限りにおいて法廷で答弁した。この状況を理解せずに、裁判記録が伝える言葉を「ジャンヌの言葉」と断定するとき、私たちはこの少女に対する最も重大な裏切りを行うことになるのだらう。

結び

シモーヌ・フレスは、社会の世俗化により人々は「声」に対する関心を失い、その結果、「声」が文学作品において表象されなくなった、と指摘する²⁸⁾。確かに現代の作品において、ジャンヌが「声」を聞く場面が提示されることはない。しかし、第3章で確認したように、たとえ「声」が聞こえてこなくても、その「声」の不在は、物語展開において、また解釈において、重要な意味を与えられている。現代の作家たちは「声」に無関心どころか、その重要性を認識している。

「声」の不在という状況が作られるのは、ジャンヌが自分の意志によって運命を選び取る姿を描くためである。しかし、「声」の領域と意志の領域を完全に分離することはできない。火刑を選ぶのはジャンヌの意志なのか、それとも「声」の導きなのか、判然とはしない。同様に、「声」の現前には、ジャンヌの意志が働いていたとも考えられる。ジャンヌ・ダルクの物語から浮き彫りになる、人間の意志のこの危うい状態こそが、文学作品において追及され続けるものではないだろうか。

(2009年9月30日受理)

27) Pierre TISSET, *Procès de condamnation de Jeanne d'Arc, Tome 1 (Texte)*, p. 287-288.

28) Simone FRAISSE, « Jeanne d'Arc », dans *Dictionnaire des mythes littéraires*, p. 859.